



オクソン 倶楽部



2020年 秋号

新型コロナウイルスの災いの日々。未曾有の危機でのコロナ自粛の中、書棚の奥から三十年振りに、「坂村真民詩集」を手を取っていました。

鳥は飛ばねばならぬ

人は生きねばならぬ

怒濤の海を

飛びゆく鳥のように

混沌の世を生きねばならぬ

鳥は本能的に

暗黒を突破すれば

光明の島に着くことを知っている

そのように人も

一寸先は闇ではなく

光であることを 知らねばならぬ

不安と混沌のこの時代に生き抜くための道標の詩人として仏教詩人・坂村真民先生をご紹介します。

オクソン季刊誌一面の寄稿を賜る為に、日本の癒しの詩人・坂村真民先生を訪ねたのは2009年の初夏でした。愛媛県砥部町の開花亭に於いて、月一回日曜日の朝に開催される真民先生の法話の会に参加しました。その後、真民先生は「タンポポ堂」にご案内下さり、自ら育てて収穫し漬込まれた梅ジュースをご馳走して下さいました。

真民先生が一番好きな花「朴の花」、その朴葉に書かれた直筆「花ひらく」(下の写真)をおみやげに頂きました。この折りの原稿はオクソン倶楽部バックナンバー2021年初春号で閲覧頂けます。

真民先生の写真は東京・皇居三の丸公園にある朴の木に会いに行かれた折の九十歳のもので、愛媛県の坂村真民記念館より、お借りしました。

念ずれば花ひらく

坂村真民は八歳の時に、小学校長をしていた父が四十才で急逝。三十六才の母と五人の幼子が残され、そこから一家の生活は一変し、五人の幼子を育てるために母は懸命に働きました。愚痴を言う代わりに、いつも母が唱えていた言葉が「念ずれば花ひらく」。この言葉が真民の詩魂に火をつけ、詩道一筋の人生を歩む原点となりました。(敬称略)



生も一度きり
死も一度きり
一度きりの人生だから
一年草のように
独自の花を咲かせよう

「自分を作るために詩を書く」「そして人びとの心に光を灯す」苦しみから立ち上がる詩を書き続けました。孤独の一本道。しかし、コツコツと希望を持って歩いていくと、前から光が差し、後ろから差しのべられる手があったそうです。

一遍上人を敬愛し、毎日午前零時に起床して近所の重信川のほとりで地球に祈りを捧げるのを日課としていた。愛媛県砥部町の自宅を「タンポポ堂」と名付け、晩年まで創作活動を継続。作品はわかりやすく、弱者に寄り添い癒しと勇気を与えるものとして多くの人々の支持を得ている。

さかむら しんみん 坂村 真民

プロフィール

明治42年熊本県生まれ。
昭和6年神宮皇學館(現・皇學館大學)卒業。
22歳熊本で小学校教員。25歳で朝鮮に渡ると現地で教員を続け2回目の召集中に終戦を迎える。
21年から愛媛県で高校教師を務め、65歳で退職。
37年、53歳で月刊個人詩誌『詩国』を創刊し、平成16年95歳まで通算500号を発行する。
平成18年97歳で永眠。仏教伝道文化賞、愛媛県功労賞、熊本県近代文化功労者賞受賞。



念ずれば
花ひらく
苦しいとき
母がいつも口にしていた
このことばを
わたしもいつのころからか
となえるようになった
そうしてそのたび
わたしの花がふしぎと
ひとつひとつ
ひらいていった